

新

# エロエロ

セクシー姫アイナの場合

小説 筆祭競介

挿絵 カグユヅ

立ち読み版



序章	青空の下で押し倒されて	006
第一章	お見合い相手は美少女誘惑お姫さま	010
第二章	セクシー姫のご奉仕フルコース	048
第三章	初恋、のち、初体験	110
第四章	いつもラブラブ♡ 日はウブウブ♡	150
第五章	自分の心に正直に	193
終章	夢の続きは、君の夢の中で	242

## 登場人物紹介

Characters



### アイナ＝ラディーチェ

ラディーチェ王家の長女。大国であるガイナスブルグ家の血を迎えるため、シャルとの政略結婚を成功させようと誘惑してくる。



今夜……私のこと味見してくれないかな。

### シャル＝ガイナスブルグ

ガイナスブルグ王家の末っ子。王位継承権はほぼなく、絵を描く旅に出る夢を持つ。

「さっきの質問に答えるね。お見合いの相手が自分でいいのか、つてやつ。こうして貴方と話をしている、ますます気持ちが悪く固まっちゃった。私のお婿さんは貴方しかない、つてね♡」

「……………え？ ええええええええええ!! な、なんでですか？」

「そんなに私のことがお気に召さない？」

「あ、あの……………そ、そういうわけじゃなくつて……………僕なんて年下だし、王族つて言つても末っ子で、王位継承権なんてないようなものだし……………そのアイナさんは、お姫さまでそんなに美人なんだからもつと他にいい相手が——つて、アイナさん……………な、何を……………わわわわわわ!!」

こちらのセリフをよそに、アイナに強引に押し倒されてしまった。

「あ、あの……………その……………いったい何を……………」

アイナが瞳を細め、こちらをうつとりと見下ろしていた。

「そんなこと、気にしないで。全部わかってて、それでも私はシャルと結婚したいつて言つてるんだから♡」

「……………つつつ!!」

なんだかモノ凄く男心を刺激されるセリフに、胸の奥がドキンと弾む。

しかし彼女は、さらに具体的に男心を刺激してくる。

「今夜……私のこと味見してくれないかな」

「ふえっ？ あ、あじみ？ な、なんの味見ですか？」

「うふふふ。まずはココの味見だよ♡」

彼女は甘く熱っぽい声でそう囁くと、ゆっくりとその美貌を落としてきた。

「えっ……あ、あの……近すぎるっていうか……あの……」

シャルは大きく目を見開いたまま動けない。

そしてアイナの美貌がピントが合わないほど近くまでやってきて——ちゅっ。

「ッッッッッ！」

唇で感じた柔らかさに、脳天に稲妻でも落ちたような快感が走る。

なに、今の？

そんな疑問に茫然としていると、唇から柔らかな感触が外れ、再びアイナの美貌にピントが合う。

「どうだった？ 私のファーストキスの味？」

「……え？ その……き、きすつて……え？」

あまりに展開が急すぎて、頭が全くついていかない。

しかし視線は先ほど自分の口に接触したであろう、肉感的な赤い唇を見詰めていた。

あの見るからに柔らかかそうで綺麗な唇が、今、自分の唇に……。

「えー！　い、いいいい今、アイナさんとキスしちゃったー！」

「つて、遅いわよ」

年上のお姫さまが頬を桜色に染めながらクスツと笑う。

「うふふふつ。国の侍女たちに教えてもらったの。キスをすればだいたい相手との相性がわかるつて」

アイナが思わせぶりの表情で、自らの唇を小指の先でセクシーになぞる。

「シャルとキスした瞬間——うふふふつ♡ 私は胸の奥がドキンってしちゃった♡」

少年はそのセリフを耳にした瞬間、胸の奥がドキンとしてしまった。

「それで、貴方はどうだった？」

「あ、あの……ぼ、僕も……その……び、びっくりするぐらい気持ちよかった……です」  
キスの記憶はあやふやだが、若い肉体ははつきりと官能の衝撃を覚えていた。

「あは♡ 嬉しい♡ なら私たち、身体の相性はいいみたいね」

「か、身体の相性つて……その……いった——ツツ……っ!!」

テンパった頭でも、遅ればせながら彼女の言わんとしていることに気づき、顔がさらに赤らんでしまう。

そんなシャルのリアクションに、アイナは再び色っぽい笑みを浮かべて、こちらの火照った頬をゆつくりと指先でなぞってくる。

ほんの僅かな感触なのに、それだけで全身が官能でゾクゾクと震えてしまう。

「それじゃあ、さっそく次の味見を始めるね。まずは——」

すると年上のお姫さまがいきなり、こちらのズボンに手をかけてきた。

「ふええっ!? ち、ちよつと! な、なな何するんですか!」

「そんなに恥ずかしがらないで。あくまでもお試し。味見の一環なんだから」

「お、お試しつて、なんのお試しなんですか!?!」

アイナの手が寝巻の紐をほどき出し、シャルは必死でそれを防ぐ。

何しろ、今、自分の股間は痛いほど勃起してしまっている。

しかし情けないかな、この手の攻防ではアイナのほうが一枚上手で——。

「まあ♡ シャルったら、もうこんなに元気になってる♡」

防戦むなしく寝巻を脱がされ下着がテント状態に張り詰めていることが、あっさりとバレてしまった。

「あああ! ソコ見ちゃだめえええ!」

といつても聞いてくれるような相手ではない。

下着まで強引に脱がされてしまう。

(ふえええええええ)。アイナさんにおちんちん見られちゃったよお)

シャルは涙目になって、己の股間に視線を向けた。

最近、ちよろりと生え始めたばかりの陰毛部分から、男性器が真上を向いてビビンとそり立っている。

肉先まですつぽりと包皮に覆われて、肉胴部分には太い血管がくつきりと浮き上がって  
いた。

「……あら？ シャルってまだ剥けてないのね♡」

「ツツツツツツ!!」

包茎なのがバレてしまい、恥ずかしさのあまり顔から火を噴きそうだ。

そんなこちらの表情を見て、アイナが優しい笑みを浮かべる。

「別に恥ずかしがることも、気にすることもないよ」

「……で、でもお〜」

「貴方ぐらいの歳なら、むしろこつちが普通だって聞いているから。私としては、こんな時からお相手できて、嬉しいぐらいだよ♡」

「……ア、アイナさん……」

男の子として気にしていた部分を、アイナほどの美少女に前向きに肯定されて、なんだか少し気楽になった。

「で、でも……なんで僕なんかこんなことまで……アイナさん、ひよつとして何か勘違いしてるんじゃない……」

シャルは一応王族ではあるが、すでに王位は兄が継ぎ、兄の子が皇太子になっている。他にも歳の離れた兄が沢山いてシャルは一番年下だ。

つまり仮に公爵となってももらえる領地は微々たるもので、位だけは高いがそんな豊かな暮らしができるわけではない。

シャルはそんな自分の立場を包み隠さず、改めて口早に説明した。

先ほども言いかけたが、一国の姫でアイナほどのケタ外れた器量ならば、もつと条件のいい縁談がいくらでもあるはずだ。

こんなことまでしてもらっておきながらではあるが、彼女が勘違いしたままこれ以上先に進んでしまうよりはずっといい。

「あら？ 勘違いしてるのはシャルのほうじゃないかな？ シャルには私のお婿さんになつてもらって、行く行くはラディーチェの玉座に座ってもらうつもりだよ」

「え？ ……ええええええええ!!」

びっくりした。

シャルは歳の離れた長兄に、まるで我が子のように可愛がられている。

今回、アイナとのお見合いを彼が了承したのも、結婚を口実に自分を王都に戻すことが出来るかと踏んだからだと思っていた。

たしか手紙にも、そのようなことが書いてあったはず。

しかしシャルが首を傾げているうちに、こちらの股の間で四つん這いになっているアイナが――。

「それじゃあさっそく、始めるね♡」

「はうう!？」

ペニスの根本を優しく摘んできた。

その感触で、頭に浮かんでいた疑問は一瞬で吹き飛んでしまう。

こちらの肉棒が真っ赤に充血するほど熱しているためか、彼女の指の感触は少しひんやりしていて心地よい。

そして、見た目はあんなに細いのに、自分の指とは比較にならないほど柔らかかった。勃起した男性器に初めてもたらされた異性の感触に、シャルはそれだけで背筋をビクンと跳ねさせてしまう。

「やっぱり男の子はココが一番敏感なんだ。いいよ、シャル。もつと感じて。私の手でいっぱい気持ちよくなってね」

アイナは妙にうっとりした表情をして、優しくシャルのペニスを握り込んでくる。

「つくふぁ!! ア、アイナさん。そ、そんなところ……だ、だめえええ」

たったそれだけで、胸が今にも張り裂けそうなほどドキドキし、息もハアハアと上がってしまふ。

自分の手でするのは比較にならない肉悦が、股間から進ってくる。

「ほーら、もつと身体を楽にして♡ 力を抜いておちんちんを私に委ねて♡」

「……ツツツ……」

もうシャルは完全に無駄な抵抗するのをやめて、アイナに全てを任せることにした。

女の子にしてもらうと、いったいどれほどの快感が得られるのだろう。

(……でも、すぐにイッチャつたら情けないな)

そんな期待と不安が入り混じった視線で、細くて白い指がゆつくりと己の肉棒を擦り出すのを眺めていた。

「はああん♡ おちんちんって、思ってたよりずっと熱くて硬いんだあ♡」

アイナは掌をしっかりと密着させながら、五本の指でペニス全面を撫でてきた。

あんなに見た目は細いのに、男根に触れる部分はやはりとても柔らかい。

(な、なんで、アイナさんにシテもらうと、こんなにも気持ちがいいのお)

ペニスの感度がいつも以上に間違いない上がつている。

何しろ彼女の指のほんの僅かな動きを、こんなにも敏感に感知できてしまう。

すると唐突に、とても気になる疑問が湧き上がってきた。

「あ、あの……アイナさん。あの……アイナさんは……他の人にも……い、今、僕にしてるみたいなこと……したことあるんですか？」

「え？ ないよもちろん。勃起している生のおちんちんを見たのも触ったのも、今が初めてなんだから」

「で、でもなんだか……落ち着いてるし……それにその……慣れてる感じだから」

「そんな風に見えるのは、シャルに喜んでもらえるように国でいっぱい練習してきたからかな。模型とか使って、こういうことに詳しい侍女たちにイロイロ教えてもらったの」

すると彼女は少し恥ずかしそうにペロっと舌を出してきた。

「だから私も、実はさつきからドキドキしっぱなしだったりして」

「そ、そうなんですか」

アイナの答えを聞いて、とてつもなくホッとした。

（つて、あれ？ な、なんでだろう？）

たとえば素晴らしい景色を目にしたら、他の人にも見せたいなあ、といつも思う。

自分が絵を描くのに夢中なのは、そんな気持ちの延長線なのかもしれない。

それは食べ物などでも一緒で、美味しいものがあれば、他の人にも食べてもらいたいといつも思う。

シャルは何事も一人占めするより、共有することに喜びを感じる性格だった。

なのになぜだろう。

このことに関してだけは——今、アイナがしてくれていることを、彼女が自分以外の者

にしていたら絶対に嫌だと、なんの違和感もなくそう感じる。

アイナがしてくれてくれているこの行為を、絶対に自分だけで一人占めしたいと強く思う。

(ふええええ)。なんだか僕が僕じゃないみたいだよお)

対してアイナは、自らの指奉仕に喘ぐこちらの反応を、頬をほんのりと桜色に染めながら興味深そうに見詰めていた。

「ねえ、シャルはドコが気持ちいいの？ 私も初めてだから、ちゃんと口で言っただけで教えて欲しいな♡」

ペニスを優しく扱きながら、潤みの強い瞳をうつとりと細め、そう囁いてくるアイナがセクシーすぎて、背筋に再びゾクゾクゾクと官能の震えが走る。

その衝撃と恥ずかしさに少年が何も言えないでいると、お姫さまがさらに追い打ちをかけてきた。

「ねえねえ、シャルう。どこなの？ おちんちんが一番いっぱい気持ちよくなっちゃうト。コ・ロ♡」

強烈に胸の奥がドキンと跳ねた。

甘えるような、おねだりするような、先ほどまで見せていた妖艶なお姉さんな感じから少し雰囲気を変えて、卑猥な質問を繰り返してくる。

エロい。

そう。今のアイナの表情やセリフのことを「エロい」と言うに違いない。

女つ氣がまるでなかった自分の人生で、初めて目にする光景だ。

彼女に扱かれ続けている男根が、ますますピギンと強張ってしまう。

シャルとしては、とにかく恥ずかしすぎて「あの、その」としか言葉が出てこない。

「もう♡ シャルってば、意地悪なんだからあ♡」

するとアイナはうっとりした顔をしてジッとこちらを見詰めながら、巧みに右手を躍らせてくる。

掌でしつとりと肉棒を包みながら、まずは親指と人差し指で先端まですっぽりと被っている皮を軽く弄ってくる。

それから徐々に指を下ろして、包皮の上から肉先を万遍なく擦り出す。

まるでその包皮を使い、中の亀頭を磨くように。

「ああああ……そ、そんなにじっくり探るみたいになれちゃうとお——んはああああ!!」

彼女の指が亀頭の付け根部分を強めに擦った時である。

「ら、らめえええ！ その裏側の出っ張つてるところはらめなのとおお！」

あつさり弱点を発見されてしまい、シャルはひたすら身悶えた。

「うふ♡ 皮を被ったままでも、やっぱりココが一番気持ちいいんだね♡」

アイナの指使いも絶妙だった。



「今さらすぎるセリフだが、完全にテンパった今のシャルにはそんな質問をするのが精一杯だった。」

「もちろん、貴方のお背中を流させてもらいにきたんだよ♡」

「ふえっ？ ぼ、僕の？」

妙に含みのある口調だな、と少年が小首を傾げた直後である——ヌルン♡

モノ凄く柔らかな物体が二つ、いきなり背中に密着してきた。

「ふへああ!! へ? な、なに……ふああああ♡」

そのままムニユンと、とてつもないポリウム感を併せ持つ柔らかな塊が、さらに強く背中に押しつけられる。

(ま、ままままさかコレってえ〜!!)

間違いない。

アイナの胸だ。

先ほど自分を一瞬で虜にしたあの美巨乳が、泡まみれになって自分の背中に押しつけられている。

胸の鼓動が再び早鐘のように、ドキドキと激しく打ち出す。

「どう? シャルの大好きなおっぱい、気持ちいい？」

「ふわっ!! そ、その……僕が大好きって……ふわわわわ♡」

アイナ自らがその女体を上下させ、泡立つ二つの特大バストが、ヌルーツ、ヌルーツとこちらの背中を滑っていく。

乳肌自体がきめ細かくピチピチとした張りがあることに加え、ボディソープのヌルつきの効果でとてつもなく気持ちいい。

豊かなバストに直に擦られるたび、背筋にじわああと柔らかな肉悦が染み込んできて、奥の背骨が蕩けそうになる。

以前のドレス越しでは、決して味わえない快感だ。

(あー。なんかめちゃうくちゃ癒やされるうー)

アイナに今まで受けた性奉仕は、直接ペニスを責められるものばかりだった。

それはそれでモノ凄く気持ちよかったが、あまりに性的快感が強烈すぎて、それを味わうような余裕はなかった。

しかし柔らかな乳房を使い、こうしてゆっくりと背中を洗われる行為は、その手の激しさとは一味違う。

とにかくひたすら心地よい。

そのためきつい内股で閉じていた両足も、いつしか普通の状態に開いていた。

「ふあー。あー。ふあああー」

ヌルヌルバストが背中をねっとりと言うたびに、口もだらしなく開いていき、いつしか

愉悅の涎まで垂らしてしまう。

「本当に気持ちよさそうだね。それじゃあ、今度はこっちのほうも♡」

——にゆるるん。ぬるるっ、さわわわわわっ。

するとアイナの両手が後ろから前に回ってきて、シャルの薄い胸から腹までを優しく這い始める。

「あ、ふああ。こっちもとっても気持ちいいです。ああああ〜」

これまでも、彼女に身体を触られると、己の指では決して味わうことのできない肉悅を感じられた。

しかしボディソープと一緒にだと、その気持ちよさがさらにワンランクアップする。

自分の胸や腹をヌルヌルと滑っていく、その細くて柔らかな指の感触がたまらない。

加えて、彼女に後ろから抱きしめられる格好となり、背中に当たる乳房との密着感もさらに増している。

(……あ、あれ?)

すると、背中にちよつとした違和感を感じた。

なめらかに自分の背中を洗っている左右の膨らみの中心に、硬いシコリができている。位置的なことを考えれば、それはあの鶉色の頂点に違いない。

(つてことは……ア、アイナさんも感じてるんだあ!?)

今までは自分が責められることに精一杯で、そこまで気づけなかった。

アイナも自分と同じように、この手の行為をすれば感じてしまう、という当たり前の事実。

(ふええ〜。なんだかそれってえ〜)

モノ凄くエッチなことだと感じてしまう。

「つて……あ、あれ？」

するとそれまで自分に密着していた巨乳がスツと離れ、シャルの口から露骨に残念な声が漏れてしまう。

「もう。シャルつてば、なんて顔してるの」

よっぽど自分のがっかりした表情をしていたのだろう。

前に回ってきたアイナが、こちらの顔を見るなり誘惑モードの妖艶な笑みではなく、素で呆れた苦笑を浮かべている。

「ふわわっ!!」

しかしシャルとしては再び彼女のトップレス姿が視界に入り、がっかり顔がすぐにパツと明るくなる。

「……そ、そこまで好きなんだ………それじゃあ♡」

アイナは膝立ちの姿勢になると、長い両手を自らの後頭部の後ろで組み、豊かな胸をこ

れ見よがしに突き出してきた。

「わわわあ〜」

ポディーソープで濡れ光る、その二つの膨らみにシャルの視線は再度釘付けだ。

鮮やかな鶉色の突起から、むっちり膨らむ下乳への丸いカーブが本当に美しい。

これまで自分が見てきた全ての曲線の中で、こんなにも魅力的なものはない。

「うふふ♡ そのままジツとしててね♡」

アイナは楽しげな口調でそう言いながら、その豊かすぎる乳房をこちらの股間にゆつくりと寄せてきた。

「シャルは「ゴクン」と生唾を飲み込んで、己の男性器が女性の象徴である二つの膨らみと接触する瞬間を見詰めていた。

元氣いっぱい反り返るペニスは、今はまだ三分の一ほど皮を被ったままである。

前回アイナに口で綺麗に剥いてもらったが、自然に剥けるほど包皮に剥き癖はついていなかった。

（ああっ。も、もうちよつとで触っちゃう……アイナさんの、あのめちゃくちや柔らかくってプルンプルンしてて、モノ凄く気持ちいいおっぱいに僕のおちんちんが——）

アイナは小手調べに軽く触れるような、まだるっこしいことはしてこなかった。

「えい♡」

両脇からその特大バストを勢いよくすくい上げ、谷間で脈打つ肉棒を一気にむにゅんと挟み込んでくる。

「はあああああん！」

男根全面を、待ち望んでいた極上の柔らかさにむっちりと包まれて、全身に愉悅の稲妻が駆け巡る。

背中を洗われていた時は、まるで肉悦のぬるま湯に浸かっているような気分だったが、快感神経の塊であるペニスを挟まれるとそうはいかない。

シャルのリアクションは、まさに肉悦の熱湯風呂に頭から突っ込んだようなものだった。顎が限界まで反り返り、イスの上で全身がビクビクと痙攣してしまう。

アイナは両手でぎゅつと自らの胸を左右から挟み込んだまま、そんなシャルを興味深そうに見上げている。

「うふふふ。どう？ 私のパイズリ。気持ちいい？」

「ば、ばいずり？」

「ええ。おっぱいでおちんちんを挟むことをパイズリって言うの」

「と、とにかくコレ……も、モノ凄く気持ちいいですう」

「私と結婚してくれれば、好きな時にこのおっぱいでおちんちんを挟めるんだよ」

「あ、あああ……そ、そんなあ」

「うふふふふ♡ それに、ただ挟むだけじゃなくって——ほくく♡」

アイナが己の乳房を、左右から押し支えている両手を使い軽く揺すり出した。

直後、乳房の狭間に埋まる男根にもたらされた特上の快感に、少年の口から愉悅の声が鋭く迸る。

——たぶムニュたぶん、ムニュたぶ、むにゅん♡

そのままアイナは豊かな胸を揺さぶり続け、中のペニスに肉悦の大波を幾重も浴びせ続けてくる。

シャルはあまりの快感にクツと奥歯を噛みしめて、反らしていた顎を強く引いた。

「シャルったらそんなに頬っぺたをプルプルさせちゃって、とつても気持ちよさそう♡」

まず視界に飛び込んできたのは、頬を桜色に染めながら楽しんで自分を見上げているアイナの美貌。

そしてさらにその下には、細身な首筋や肩に反した、豊かな二つの白い盛り上がり。

両手で脇から支えられているため、上から見下ろすとなお一層、むっちりとした盛り上がり深い谷間を作っている。

（あああ……この中に、僕のおちんちんが丸ごと埋まってるなんてえ……）

この世で一番魅惑的だと感じたモノの中に、自分の男性器が埋まっていると思うとそれだけでイッてしまいそうになる。

「ッ……つくう……ッ……くう……」

この気持ちいいパイズリを少しでも長く味わっていたいため、シャルは何度もグツと奥歯を噛みしめて、その衝動に耐え続ける。

「そんなに我慢しなくても、好きな時にイッていいんだよ」

アイナが左右からギュッと両手に力を込めて、強く肉棒を挟み込んできた。

直後、柔らかな乳肉の全重量が、その中心に埋まるペニスに一気に凝縮。

「ッくふああ!!」

高密度な肉悦が、男根の芯まで浸透してくる。

「ああん♡ 今、おちんちんが凄くビギンって……それじゃあもつともつと、気持ちよくなれるようにこうしてあげるわ♡」

しかもアイナが胸を強く寄せあわせたまま、上半身をゆっくりと上下させ始める。

「素晴らしい！ プリプリしたおっぱいに、僕のが丸ごと全部擦られて——はあああん！」

ずっと引きつけていた顎が再び豪快に仰け反ってしまったのは、肉先に残っていた包皮が乳房の中で完全に剥けきったため。

「まだ外気に触れることすら慣れていない、特に敏感なエリア——亀頭の肉傘部分が、柔らかな牝肉と密着したままヌルンヌルンと扱かれ続ける。

「あああ！ もうらめっ！ もうらめえええ！」

アイナに挟まれた直後からイキそうで、それでも必死に我慢していたが、さすがにもう限界だ。

引き返せないところまで、官能の昂りが腰の奥で膨らみきっている。

「イッチャうよおおお！ アイナさんの、こんなに綺麗でおつきなおっぱいの中で、僕もイッチャうからねえええ！」

「はあああん！ いいよお！ 思いつきり出して！ シャルの大好きなこのおっぱいの中で、思いつきりドクドクしてえええええ！」

シャルは大きく足を開いた姿勢のままイスの縁を両手で掴むと、最高のフィニッシュを迎えるために、無意識に腰を浮かせて前へグイッと突き出していた。

直後、乳肉の凝縮した圧力によって強く絞り上げられている肉棒の中を、熱い粘液が一気に貫いていく。

——ドギュどりゅっドブン！ ドプどぎゅっどりゅっドプどぎゅん！

ペニスの全面を柔らかなバストに包まれたまま行う射精は、意識の全てがそこから溶け出していつてしまうような、壮絶な快感だった。

「あん♡ 凄い♡ シャルのがおっぱいの中でビュクビュク跳ねまわってる♡」

アイナはもう上半身ごと動く上下運動をやめていた。

自らの特大バストで脈動ペニスをがっちり挟み込んだまま、甘くて熱い吐息を「はああ



ん♡」と漏らし、全てを受け止めてくれている。

「つくふあ……ふはあああ」

そうしてシャルは、自分を魅了し続けた柔肉の中で長い射精を終えると、無意識に息ませていた全身から力を抜いた。

そのまま浮かせていた腰も、ストンとイスの上には落とす。

「今回もいっぱい出してくれたね。うふふ。どう？ 気持ちよかった？」

シャルは盛大な射精直後で、肩で息をしながらコクコクと頷く。

「アイナさんのパイズリ……モノ凄く気持ちよかったです」

三歳年上のお姫さまは満足そうな笑みを浮かべると、己の胸を左右の脇からずつと支え続けていた両手を離した。

——たぶるるるん♡

柔らかな二つの膨らみが、重量感満点に揺れながら元の美しい形へと戻っていく。

（うわああ……あ、あんなに僕のがべつたりと……）

シャルの視線が再び彼女の胸の谷間に釘付けとなったのは、雪のように汚れなく真っ白だった彼女の胸が、谷間が擦れてほんの少し赤くなり、そこに己の排泄液がたっぷりとへばりついていたからだ。

この世で最も美しいと思った彼女のバストが、自分の小さなペニスを気持ちよくするた

めに、あんなにも汚れてしまった。

その光景に申し訳ないと思う反面——ほんのちよっぴり牡としての征服感みたいなものが満たされて、妖しい気分にもさせられる。

「もう。また、私じゃなくなつて、私のおっぱいを見る」

アイナがおどけた調子で「こら」と瞳を眇めてきたので、シャルは慌てて「ごめんない」と視線を逸らした。

その姿に、雄々しい征服者としての傲慢さは微塵もない。

「ねえ、シャル。こつちを向いて」

アイナがパイズリ前と同じように膝立ちの体勢となり、両手を後頭部に回す誘惑ポーズを取ってきた。

自ら胸を張るようにして、その豊かなバストを強調してくる。

そして左手は後頭部に回したまま、自らの右手をゆっくりと胸の谷間に持つてゆき、人差し指を一本立てて——ぬるん。

白濁の粘液を、その指先で己の乳房に塗り伸ばす。

「しっかりと見ててね。シャルが吐き出してくれた精液を、私が自分のおっぱいに塗り広げちゃう、と・こ・ろ♡」

彼女はそのまま掌まで使い、宣言通り己の胸にヌチュヌチュと白濁の粘液を塗り伸ばし

始めた。

アイナの胸が再び白い液体によって——シャルの精液によって——濡れ光り、卑猥すぎる光沢を放ち出す。

(こ、こんなのエッチすぎるよぉ〜!?)

牡の本能を強制的に刺激するようなお姫さまの行為に、少年はイッたばかりだというのに両脚をモジモジさせてしまう。

しかもアイナは、さらに強烈な追い打ちをかけてきた。

「はぁあん♡ シャルのホカホカザーメンでヌルヌルしてたら、乳首がこんなにピンピンになってきちゃったぁ♡」

自らの掌によって揉み込まれている鶉色の頂点が、硬く尖っていることをアピールしてくる。

彼女の指がその上を滑るたびに、勢いよくピンピンと立ち上がるのを「あん♡ あん♡」と甘く喘ぎながら見せつけてくる。

そしてとうとう彼女は自らの乳房を片手で持ち上げつつ、高貴な美貌をそちらに寄せていき——ペロン。

舐めた。

ザーメンまみれでピンピンに立っている自らの乳首を。

大胆に出した桃色舌で鶉色の突起をくるみ込むようにして。

「あん♡ おっぱいの先っぱ、ゾクンってしちゃう♡」

「ツツツツツ!!」

シャルはその卑猥すぎる光景を、顔を真っ赤にして食い入るように見詰めていた。

イッたばかりの男根も、ムクムクと再びその頭をもたげ出す。

そんな己の反応に気づき、シャルは股間を見下ろした。

「さ、さつきあんなにいっぱい出したばっかりなのに……も、もうこんなに……」

自分の身体の一部にもかかわらず、勝手な振る舞いばかりする男根に啞然としてしまう。

「あは♡ 昼間に食べたホルモンが効いてるのかな♡」

「ふえっ!!」

「私の国だと、栄養満点で滋養強壮にいいって言われてるの♡」

「どうやらただ『あーん』をするためだけではなく、後の情事まで考慮して、あの料理を作ってくれたらしい。」

「とにかくシャルがすぐに元気になってくれて、嬉しい♡」

するとアイナはこちらを勃起させて目的は果たしたと言わんばかりに、おもむろに手桶で湯をくむと、ザーメンまみれにした胸にそれをかけて汚れを流した。

そして改めて自分の前に来る。

対してアイナは「はあぁん♡」と甘い吐息をつき、まるで軽く達してしまったかのよう  
に、その女体をすでに小さくビクつかせている。

そしてシャル以上に切羽詰まった顔で、濃い羞恥に頬を赤らめながらも口を開く。

「シ、シャルさまのお……この立派なおちんちんをお……ア、アイナの……はあぁん、だ、  
だめええ……も、もう恥ずかしすぎてえ……これ以上はだめなお……」

「ダメじゃないです！ 言ってください！」

「ツツツ……シ、シャルさまのおちんちんを……ア、アイナのお……エッチなアソコに入  
れさせてください……あぁん。いやぁん」

猛烈に恥じらいながら、自分を求めるセリフを口にする彼女の表情がエロすぎて、思わ  
ず鼻血を吹き出しそうだった。

さすがにこれ以上焦らすのは、相手以上にこちらが限界だ。

「いいですよアイナさん！ 僕もアイナさんとシタいです！」

そう叫ぶと同時に、金髪のお姫さまが切羽詰まった顔で起き上がる。

彼女は膝立ちの姿勢になると、両手を自身の腰の裏に回し、大きなピンク色のリボンを  
しゅるりと解いた。

それだけでアイナの白いスカートがファサアと下に落ちる。

（このドレスって、そんな仕掛けになってんだー！）

しかも今日の彼女の下着は、腰の横でリボン結びをしているタイプ。

お姫さまはそれも指で摘んでしゅるりと解き、ほんの数秒で下半身だけ丸裸になる。

「……そ、それではシャルさま……上から失礼いたします」

そして彼女はそのままオズオズと膝で歩き、こちらの股間を跨いできた。

こんなにも恥じらっているくせに、一刻も早く自分と一つになりたくって、上半身の衣服に関しては手袋すら脱ぐ気がないようだ。

そのため上着の青い前垂れによつて、彼女の股間はこちらの視界からは隠れて見えない。

「……はあん……シャルさま……こんなにはしたくない嫁で……ごめんさい」

アイナは真上を向いてそそり立つ男根を、右手を前から回して掴んでくる。

そして股間の前を隠すようにして垂れている上着の前垂れも左手で掴んで捲り、自らの唇でハムツと固定。

シャルの目に、柔らかかそうな毛並みをした金色の茂みがやつと映る。

それから改めて左手を己の股間に伸ばし、自らの牝裂を人差し指と中指を使って、くぱあ、と開く。

それだけで透明な蜜液がトロ〜と糸を引き、真下にそそり立つこちらの肉先に滴り落ちてくる。

(アイナさん、この前以上にヌレヌレだあああ！)

一連のアイナの行動を横になって眺めていただけで、シャルの鼻息も荒くなる。とにかく彼女と一刻も早く一つになりたい。

あの奥までヌルヌルでトロトロな蜜壺の中に埋まりたい。

「は、早く！ アイナさん早くううう！」

切羽詰まった少年の叫びに、お姫さまが真っ赤な顔でコクツと頷く。

彼女の手で固定された肉先が、牝路の入り口にちゅぷりと当たる瞬間を、シャルは陶然と眺めていた。

亀頭が感じた熱い潤みに、全身の細胞がゾワツと騒ぐような愉悅が走る。

さらにアイナが腰を落とす、シャルの亀頭が彼女の中にクプンツと埋まり込むと――。

「――っ……ンはああ♡」

彼女の口が開いてしまい、咥えていた前垂れが再び股間を隠すように落ちてしまう。

「ああ……。き、今日のシャルさまも……。ツツ……。あ、熱くて、硬くてえ……。はああん。本当にご立派ですううう」

そして二人の股間が完全に密着すると、金髪のお姫さまは顎を天井に向けてるようにして顔を反らせた。

奥までしつかり潤いきった熱くてヌルヌルな蜜壺に、男根を丸ごと包まれる肉悦に、これが二度目の少年はいきなり暴発しそうになってしまう。

それを耐えるため「ツツく……」と奥歯を強く噛みしめた。

「……私たち、また一つになっちゃいましたね♡」

アイナは反らしていた上半身を前に倒し、自らの身体を支えるために両手をベッドにつける姿勢を取る。

そして慎重に腰を上げ始めた。

『ああああああ〜』

二人の口から、糸を引くような粘っこい官能の音が溢れ出る。

男女の性器を一つにしてこうして直に交わる行為は、たとえ二度目でも全くその肉悦は色あせない。

むしろ初体験時ほど過剰な興奮に陥っていない分、セックス本来の快感をよりしつかりと味わえている。

——くちゅん。ヌチュ、くちゅ、ムチュ、くちゅ、ぬちゅん。

彼女が始めた穏やかな腰の上下運動に合わせて、シャルの吐息も熱っぽく上がっていく。  
(それに。下から眺めるアイナさんのおっぱいが……凄い迫力だよお)

ただでさえ彼女の巨乳が大好きなのに、今はそれがまさに目の前で揺れている。

服を着たままでも、柔らかかそうにタパンタパンと弾んでいることが、これだけサイズが大きいと丸わかりだ。

オールヌードのアイナのもちろんいいが、こうして服を着たままの彼女と交わるのも、一味違った趣がある。

着衣のまま——日常生活時の姿のまま、非日常の極みと言ってよいセックスをすること  
で、何やら妖しい背徳感のようなものを刺激される。

それは性欲を萎えさせるどころか、より感度を高めるスパイスだった。

シャルはたまらず、服の上から彼女の胸を鷲掴みにしてしまう。

「そんなにおっぱいをギュッてされると……はあぁん。もう、シャルさまだめええ」

感じる場所が胸と生殖器の二か所になると、恥じらうお姫さまは愉悅に耐えられなくなつたのか、上半身をこちらのの上にカクンと倒してきた。

そしてシャルの下唇を、甘えるようにペロリと舐めてくる。

「ツツツツ!!」

ゾクンと新鮮な愉悅が弾け、シャルは驚きで目を見張った。

確か丘の上で手作り料理をご馳走になった時にも、同じようなことをされたと思う。

ただのキスとも舌を絡めあうディープキスとも違うその独特の快感に、蜜壺に埋まる男根がビギンと剛直を強めた。

「シャルさま……今のそんなに気持ちいいですか？ はあん嬉しい♡ もつともつと気持ちよくなってください♡」

アイナはそのままキスをせず、こちらの口まわりにペロペロと舌を這わせ出す。一番肉厚な下唇を舐められると、じんわりと心地よい愉悅が広がる。

しかし彼女の舌先が、こちらの口の端——唇が一番薄い根本の部分を舐め出すと、敏感にゾクゾクと鋭い快感が弾ける。

（こんなところを舐められても、こんなに気持ちいいんだあー！）

思えば初めてキスをした時に、脳味噌が痺れるような快感が駆け抜けた。そしてディープキスをする際も、舌だけでなく唇も激しく混じりあわせている。

今まで自覚をしていなかっただけで、唇も相当な性感帯なのだ。

「んはあ♡ アイナさんもお——レロんちゅ、れろむちゅう♡」

それがわかると、シャルも相手と同じように舌を出し彼女の唇を舐め出した。

「シャルさまだめええ。そんなことされちゃうと、私までいっぱい感じすぎちゃいますう」  
アイナも自分と同じように、唇を舐められれば敏感に身体を震わせる。

少年を包む溝の深い膣襖たちも、気持ちよさそうにキュンキュンと中のペニスを絞り込んできた。

二人はキスをする直前の距離で向かいあったまま、互いの唇を舐めあい出した。

向かいあった二つの口から桃色の舌が伸び、互いに唇の上と下、そして端から端までを何度もねぶる。

時には躍る舌がぶつかりあい、そのまま濃密に絡めあう。

アイナは腰の上下を止めているが、物足りなさなど微塵も感じなかった。

(コレも気持ちいい！ アイナさんとペロペロするのは、どんなことでも気持ちいい！)

むしろ、そうして新たに知った肉悦を二人で夢中で貪っていると、彼女の中に埋めた男根がさらに剛直を強めてしまうほどだ。

「つぶふああ♡ シャルさまのが、私の中でビキビキすぎて……も、もう……アソコの中が我慢できないぐらい、モノ凄く疼いてきちゃって——はああああん♡」

すると上に乗るお姫さまが辛抱たまらないという感じで顔を上げ、そのまま上半身を起き上がらせた。

そして先ほどまでの極端な前傾姿勢ではなく、逆にシャルの腰の上で胸を張るような動きやすい姿勢を取り、再び腰の上下を再開させる。

「だ、だめえええ。こ、腰が勝手に動いちゃって……ああん。シ、シャルさまが見てるのにいい……こんなのだめええええ」

羞恥のために真っ赤な美貌をフルフルと左右に振っているが、その貪婪な腰使いをどうしても止められないようだ。

(うわああ♡ この腰付き……なんだかめちゃくちやエロいんだけどお♡)

腰を完全に下げた状態から、己のヘソの方向へ向けて、斜めにじつくりと腰をせり上げ

ていく。

そして蜜壺から亀頭が出てしまうギリギリの辺りでクイッと腰の位置を戻し、ペニスの真上に己の芯を持ってきて、そのまま腰をくちゆりと落とす。

一回、一回、腰を上げていく方向や強さを変えて、あらゆる角度で中に埋まる肉棒との摩擦を楽しんでいる。

「ああん、ダメえ。シャルさまあ、私のこと、そんな目で見ちゃいやああ」

ひととき新鮮やかに、彼女の美貌がカーッと赤く染まる。

強い恥じらいをずっと見せ続けていたアイナだが、さすがにこの行為は中でも一番恥ずかしいようだ。

（アイナさんってば、それでもまだ腰をへこへこさせちゃってるよ！）

それでもなお淫らかな腰の動きを止められないお姫さまは、とうとう涙目になって、小さく顔を横に振り出した。

「いやん、だめえええ！ ああつ……でも、くふううう。感じちやううう。シャルさまをいっぱいかんじちやううう！ どうしても腰を止められないのおお！」

彼女が恥じらえば恥じらうほど、その動きが卑猥に見えてくるものだから、見ているこちららはたまらない。

（それにアイナさんのこの腰付き、こっちも凄く気持ちいいし！）

互いの性器を一つにしているのだから、事情は受け身側のこちらも同じ。

彼女が腰の動きを変えらるたびに、新たな愉悅が竿肌で弾け、それが止めようのない愉悅の声となつて口から漏れる。

しかし今のシャルは一方的に責められ続けて、そのまま絶頂を迎えてしまうような、以前のウブな少年ではない。

「アイナさんエッチすぎですううう！」

ベッドの上で横になつたまま、腰が自然に上へと向かつて弾み出す。

「はあああん！ シャルさままでいきなりそんなあああ！」

アイナも自分がコントロールできないタイミングで奥を貫かれ、たまらず金髪を振り乱して愉悅を叫び出す。

——グちゅん、くぬちゅん！ グチュ、ぐちゅッ、ぬちやヌぶん！

下から突き上げる肉棒と、その上で躍る牝華が激しく混じり、彼女の蜜液がシャルの下腹に飛び散り出す。

「らめっ！ らめえええ！ シャルさまが動き出しても、気持ちよすぎて腰の動きが止められないのおおお！」

（うわあああ！ アイナさんが、あんなにガクガクになりながら喘いでるうう！）  
彼女はいまだ上半身はドレス姿のまま、激しく身体を上下させている。

首まわりのピンクのフリルがふわふわと揺れ、純白のロング手袋に包まれた両腕がバランスを取るために脇を締めながら上下していた。

「シャルさまごめんなさい！ こんなにエッチな女の子でごめんなさいい！」

彼女がドレス姿をしているからこそ、以前とのギャップをより強烈に実感できる。

エッチに関しては自分よりずっとお姉さんで、なんでも優しく淫らにリードしてくれた相手が、こんなにあられもなく喘いでいると思うとたまらない。

（おっぱいも、服の中であんなにバインバインって揺れてるしいい！）

自分を魅了してやまない二つの柔らかな盛り上がり、彼女の身体が上がるたびに、ゆったりしている薄い白生地を、半拍遅れて丸くピチピチに張り詰めさせる。

そのたびに大きなサファイアのネックレスが、下から見るとその谷間に埋まるように隠れてしまう。

——ぐちゅん！ くちゅちゅ！ くちゅズチュ、ぐちゅん！

最初は興奮で好き勝手に動いていた二人の腰が、より多くの快感を得るために、自然と動くタイミングがあつていく。

その一体感は、身体だけでなく心までもが一つになっていくような感覚をもたらす。セックスによつて得られる快感を、より深く甘いものへと昇華させていく。

「あああつ！ こんな気持ちちよすぎてえええ！ も、もう僕イッチやいますうう！」

腰の奥では、もう引き返せない官能の昂りがパンパン膨れ上がっていた。

何しろたつぷりと口でしゃぶられてから、蜜壺でも散々捏ねくり回されての今である。

溝深い膣壁たちに愛液まみれになりながら、ペニスを絞り上げられるだけでも極上の快感なのに、アイナとのセックスには他の刺激も多すぎる。

「あああ！ 今度は一緒に！ シャルさまと一緒にイかせてください！」

こちらの限界宣言を聞いたアイナが、腰の動きを一切緩めずにそう絶叫してくる。

初体験の時は彼女が先にイッてしまい、自分はその僅かに後だった。

今度は二人で同時に登りつめたいということだろう。

「僕もです！ 僕もアイナさんと一緒にイキたい！」

無論、シャルも同じ気持ちだった。

二人の男女は激しく交わりながら見詰めあう。

今、二つの腰の動きは完全に一致していた。

絶頂に向かう精神と肉体の昂りが、震えや上擦りとなって喘ぎ声に滲み出る。

アイナさん、シャルさま、と互いの名前を連呼しながら、それをセックスの動きと同じ

ように、少しずつ相手に合わせていく。そして――。

『あああああああああああああああああああ！』

愉悦の絶叫が完全にハモった。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!